

2021 家族旅行「淡路と鳴門」

右城 猛

1. まえがき

久しぶりに家族 10 人揃って、8 月 11 日、12 日の 1 泊 2 日で、鳴門の渦潮見物と大塚国際美術館へ行ってきた。

宿泊先は鳴門の「アオアヲナルトリゾート」(旧・「ルネッサンス リゾート ナルト」)である。

2. うずしおクルーズ

この日の干潮は 13 時 45 分である。淡路島の福良港 12 時 50 分発のうずしおクルーズ船に乗るため、8 時 30 分、右城家、堀田家(祐希と航希右城家の車)、明神家に分かれて 3 台のマイカーで我が家を出発した。

驚いたことに、うずしおクルーズ船が発着する「道の駅福良」は、観光客でごった返していた。先週に旅行した青森の経験から、観光地はどこもガラガラと予想していたが完全に外れた。12 時 50 分発と 13 時 30 分発のクルーズ船はいずれも満席で、14 時 10 分発のクルーズ船「日本丸」に乗船することにした。

出港まで、道の駅の 2 階のレストランで昼食をとったり、美人湯として名高い「潮崎温泉」の温泉を使った足湯「うずの湯」で時間を費やした。



足湯で戯れる孫たち



背後の建物が足湯「うずの湯」



日本丸に乗船して、60 分の船旅に出航



福良港を出港



もう一隻のクルーズ船「咸臨丸(かんりんまる)」とすれ違うとき、福良港を出港するときに渡されたピンクのハンカチを全員が振る。



徳島県鳴門市と兵庫県南淡路市の鳴門海峡に架かる大鳴門橋。1985年(昭和60年)6月8日に開通した。

橋長は1,629m、中央径間は876m、幅は25m、主塔の高さは144.3m。鳴門海峡の渦潮に影響を及ぼさないようにするため、主塔の基礎には多柱基礎が採用されている。橋は上下2層式となっており、上部は片側3車線の道路(現在は計6車線の内、中央4車線を使用)、下部は将来的に鉄道(四国新幹線)を通すことが出来る構造となっている。ただし、明石海峡大橋が道路単独橋で建設されたので淡路島より本州方面への鉄道整備に関しては紀淡海峡トンネル等が必要となる。



鳴門海峡では世界最大の渦潮が発生すると言われているが、今日は中潮であるため大きな渦潮は見られなかった。



瀬戸内海側と太平洋側で水位差が生じ、海流が滝のように流れている。

3. アオアヲナルとリゾート

鳴門市土佐泊浦にある「アオアヲナルリゾート」に宿泊する。以前は「ルネッサンスリゾート ナルト」の名称で営業されていたが、2019年4月に開業30周年を迎えたのを機に、マリオット・インターナショナルとの契約を終了させ、オリジナルブランドを立ち上げたそうである。

ホテルを運営しているのは、以前と変わらず本社が大阪にあるエイチピーディコーポレーションである。



家族揃っての食事。JTB 高知支店から白ワインの差し入れがあった。



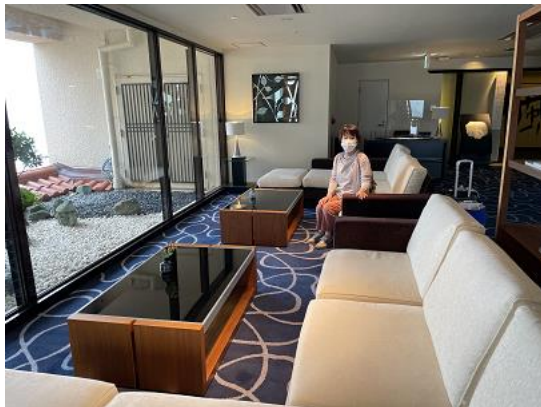
鯛の塩釜焼き。木槌で表面の塩をたたき割る



蒸し上がった鯛を取り分けてくれるスタッフ



ホテル内の「たぬきの縁日」。コルク玉を使った射的。祐希にとっては、これが今回の旅行で一番楽しかったようだ。



ジャパニーズスイートがあるホテル7階の専用ラウンジ。ここから大鳴門橋が目の前に見える。抜群の眺望である。7階にはジャパニーズスイート宿泊者専用の特別展望風呂がある。

7階にエレベーターで来るには、専用の鍵が必要である。



7階ラウンジのドリンクコーナー。おしゃれなコップでコーヒーを飲むことができる。

4. 大塚国際美術館

10時にホテルをチェックアウト。外は生憎の雨。

大塚国際美術館もすごい人出であった。青森とのあまりの違いに驚かされた。

一般の入場者は遠くの駐車場に車を止め、シャトルバスで送迎されるが、私たちの車は航希を乗せていたので、特別に係の人が美術館内の地下駐車場に案内してくれた。



「B3 展示室 1」の入り口



最初の作品は、モデルコース 1 番の「システイーナ・ホール」。ミケランジェロが 1508 年から 1512 年にかけて描いたバチカン市国のシステイーナ礼拝堂の天井フレスコ画である。



システイーナ・ホールの奥の壁面には、レオナルド・ダ・ヴィンチ作の「最後の晩餐」の顔出しパネルがあった。

大塚国際美術館には、「顔出しパネル」や「間違い探し絵」など小さい子供が飽きることなく楽しめる工夫がされていた。



ポンペイの壁画「たんぶらーんの戯言」



ポンペイの壁画「貝殻のビーナス」



ミケランジェロによる「アダム」の顔出しパネル（システイーナ礼拝堂天井画）。



フランスのルーヴル美術館が所蔵するレオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」

5. あとがき

コロナ禍であるにも関わらず淡路も鳴門も観光客で溢れていた。青森との違いは何だろうかと思った。

大塚国際美術館は二度目であったが、改めて世界に誇れる素晴らしい美術館であると思った。

大塚国際美術館は、大塚グループ創立 75 周

年記念事業として 1998 年に開館した「陶板名画美術館」である。鳴門海峡白砂海岸の白砂を使い、大塚オーミ陶業株式会社の技術で製作した陶板名画は、2000 年経っても色あせすることがなく残るとされている。

古代壁画から世界 26 カ国 190 余の美術館が所蔵する現代絵画までの西洋名画を原寸大で 1,000 余点展示している。

すべての作品をじっくり鑑賞すると、1つの作品を 2 分として約 40 時間、1 週間にかかる計算になる。ガイドブックに示されているモデルコースに従うと、代表的な 35 の作品を 90 分で鑑賞することができる。

私が西洋美術を鑑賞したのは 1993 年、43 歳の時が最初であった。フィレンツェのウフィツィ美術館でラファエロ、ボッティチェリ、レオナルド・ダ・ヴィンチなどルネッサンス期の名画を見たとき、あまりものリアルさと美しさに感動するとともに、幼少時代にこんな作品に触れていれば、私の人生は変わっていたかも知れないと思ったことであった。

大塚国際美術館に来れば、古代壁画から現代絵画までの西洋名画を、四国に居ながらにして体験することができる。ありがたいことである。このような立派な美術館を造り、一般に公開している企業が四国にあることを誇りに思う。

じっくり鑑賞したかったが、孫たちも一緒であったので時間がなかった。改めて、音声ガイドを聞きながら、ゆっくり鑑賞したいものだと思った。